

焼き畑と環境

熊本県の五木村へ行ってきた。村を流れる川辺川のダム建設の是非をめぐりさまざまな議論もあったが、村の中心集落はすでに高台に移転していて、昔の「五木の子守唄」の風情はもうなかった。しかし周辺の集落の中には昔の景観をとどめたところもあり、かつては盛んに行われていた焼き畑の痕跡も随所にみられた。ある高齢の方からは、今は高名な研究者が若いころ、村に焼き畑の調査によく来ておられたとも聞いた。

焼き畑は生産性も低く、生活スタイルの変化もあって今ではその姿はほとんどみられなくなった。山を焼くことは森林破壊の最たるものであり、しかも地球温暖化のおおきな原因とされる。焼き畑は今ではほとんど環境破壊の元凶とまで思われ、日本のみならず中国や東南アジア各国でも廃止の対象になっている。

しかし、焼き畑が大気中の二酸化炭素量を増やすというのは本当だろうか。たしかに、熱帯の各地で見られた、森の再生を許さないまでの大規模な焼き畑が、二酸化酸素を増やし環境を破壊するのは事実かもしれない。しかし、いったん伐られて再生した新しい森が伐られなかった古い森より多くの二酸化炭素を吸収するという専門家もいる。東南アジア各国もいまは焼き畑を禁じているところが多い。低地に移り住んで常畑での稲作を始めた人びともたくさんいるが、そこで使われる肥料や農業にかかる経費、それらを作ったり、農業機械を使ったりすることで発生する二酸化炭素の量などを計算すると、その収支はどうなるのだろうか。

山の落葉樹の下に、たくさん茶樹が生えているのを見た。その種子はやがて地中にもぐるが、もし土地が焼き畑として開かれると休眠が解け、芽を出す。それは、二、三年ほどの穀物の栽培の間に育ち、休耕してしばらくたつと茶葉が摘めるまでになる。休耕した土地には、茶樹の他にもタラなどいわゆる山菜や、生活に必要な資材となるさまざまな有用な植物が生えている。焼き畑は休耕を伴うものだが、休耕地は決して無駄な土地などではなかった。随所に残る竹林はかつてそこに人が住んだことのあかしという。竹は、生活のあらゆるところに使われ、それゆえ極めて有用な植物であった。集落を移すときには、竹の株を一緒に運んだのだろう。

焼き畑を営んできた人びとの暮らしの中にはしばしば山の神さまが登場する。山を焼くにも、作物を収穫するにも、神さまに対する儀礼がおこなわれる。それは儀式というより、生活にねざした生活に根ざした山への思いのようなものであると私にはみえる。神さまに対するこうした思いが、山の伐り過ぎを押さえ、過酷な労働に耐える心の支えとなっていたかもしれない。神様がなくなったことが、焼き畑の暮らしを荒廃させたもうひとつの理由だったようである。

佐藤洋一郎， 現代のことば（京都新聞 2006・3・7）